

タイトル：2022年度 教育セミナー（第18回）

日時：2022年9月15日（木）～18日（日）

ハイブリッド開催

「現代イランにおける啓示をめぐる論争を読み直す」

宇川晴（東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻修士一年）

四日間のセミナー、お疲れ様でした。公的な研究会に参加するのは初めてだったので貴重な経験になりました。セミナーを運営してくださった先生方、どうもありがとうございました。以下、大きく二つに分けて感想を述べさせていただきます。

一点目は研究テーマの選定に関してです。長縄先生の講義では、英語論文を書く上では地域研究の枠を超えた意義が求められるという話がありました。実際、学生の発表に対する質疑でも、直接の先行研究に対する批判を超えて何が言い得るのかということが度々質問されていました。自分としてもこの点は重要だと思います。直接の先行研究に上乘せをするだけでは広範な聞き手、読み手を獲得することは難しいからです。ただこのこと自体は地域研究をやる人も自覚しているのではないのでしょうか。むしろ問題なのは「いかにして」地域研究の枠を超えるかという点にあるのだと思います。他地域との安易な比較が解決策になるとは思えません。地域研究と地域研究の組み合わせで終わってしまう可能性があるからです。そうなれば、それらの地域に関心を持たない人が関心を持てる研究にはなりません。私自身としては、重要なのは理論的な先行研究を参照することだと考えています。もちろん今現在理論的とされている研究が本当に理論的なのかは考えなければなりません。そうした研究が実際には地域的な性格を帯びていることもあるからです。ただ理論的な研究の全てがそうであるわけではないですし、理論的とされる研究の地域性が明らかになればそれはそれで意味のあることだと思います。

それでは地域研究の立場から理論的な研究にどう向き合うべきでしょうか。当然地域を無理に理論に当てはめてしまうことは避けなければいけません。私は、地域研究では、具体性の後に抽象性を求めることが適切だと考えます。具体性だけを求めれば閉じた研究になってしまいます。具体性だけでなく抽象性もやはり必要でしょう。他方、具体性の「後に」抽象性を求めることの一つの意味は、比較的思弁的な議論に対して問題を提起できる点にあると思います。思弁的な議論は可能性と危険性を同時に兼ね備えています。具体的な議論よりも早く正しい結論に辿り着くこともあれば、早いだけで結論が間違っていることもあります。こうした欠陥を補うことができるのが、地域研究の意義ではないのでしょうか。

今回のセミナーは上のようなことを考える良い機会になりました。繰り返しになりますが、こうしたセミナーを開催していただきありがとうございました。またご縁がありましたらその時はよろしく願いたします。